
お酒の覚え方

藍雨 和音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お酒の覚え方

【Zコード】

Z2602P

【作者名】

藍雨 和音

【あらすじ】

出来る過ぎる兄、桂木 慶吾を持った高校二年生の桂木 春香は時々、知り合いからの仲介を受け、自分は彼氏もいないグレーの日常を送っていた。

しかし出来過ぎる慶吾にも弱点があった。

そんな慶吾の尻拭いに借り出された春香はいつもとは違う一人を見る。

そして、話は落としていった・・・

この小説に出でくる人物・企業名・団体名は全て架空のモノです。また、未成年の飲酒シーンがありますが未成年の飲酒を助長・擁護するものではないことをここに明記します。

お酒とタバコは二十歳を過ぎてからです

では以上の点を踏まえたうえで藍雨 和音の斜道で屈曲した、救いよつもない喜劇をお楽しみください

第一話・常（前書き）

この小説には近親相姦を描いたものです
上記のことと踏まえたうえでお楽しみください

第一話・常

「ねえ春香ちゃん。春香ちゃんのお兄さんってカッコいいんでしょ。今度紹介してよ。」

「別に普通のサラリーマンだよ。家じゃいつもだらけてるし。それでもいいならいいよ。」

またが、そう思いながら、もう何度目になるか分からぬ仲介を引き受けた。

春の陽気に誘われて、幼馴染の奏絵と一緒にオープンカフェでお茶していた私のテンションは急降下する。

逆にテンションを上げて立ち去った娘に向けて思いつきり視線を飛ばす。

そんな私の様子を見ていた奏絵は楽しそうに声を上げて笑っている。

「相変わらず聖也さん人気だね。卒業したのにまだまだ人気あるんだ。」

「良いことなんて全然ないよ。寄つて来るのは女の子ばかりで私は男の子に告白もされないし。お兄ちゃんと同じ遺伝子受け継いでいるのにどうしていつも出来が違うのかなあ。」

くたーっと頃垂れていると、もつ何度もになるか分からぬ疑問を吐露する。

目を瞑つて耳を澄ませば奏絵の笑い声と静かな風の流れがゆっくりと耳をくすぐった。

第一話・常（後書き）

誤字脱字がございましたら 一言お願いします
感想・一言などを頂けると和音は大変喜びます

第一話・兄

私の兄、桂木 慶吾は完璧人間だ。

今から二年前の中学一年生の夏お父さんとお母さんは交通事故によつて帰らぬ人になつてしまつた。

泣きじやぐしかできなかつた私とは違つた。

親戚が私たちの処遇と田畠の保険金を巡る押し付け合ひこと奪い合ひ。

当時大学一回生だったお兄ちゃんは毅然とした態度で私たちの親権を昔からお父さんと交友のあつた白河さんつまり奏絵のお父さんに委託した。

そしてその保険金や財産のほとんどに手を付けることなく大学を無

事外資系企業に就職したのが去年。

スポーツ選手のよつに背は高く、モデルのよつなスタイルとルックス、その上勉強は出来て奨学金を得られなかつた年は一年もなかつた。

お兄ちゃんが在学の間は一月中旬から三月の初めまでは毎日が甘いチョコレートで、まさに少女漫画からそのまま抜け出したような人だつた。

そんな完璧人間と名高いお兄ちゃんにもたつた一つ、いや二つどつしそうもない弱点がある。

そしてその二つの弱点はパンポイントで私を悩ませる原因になつている。

奏絵とティータイムを済ませた私は家の近くにあるスーパーマーケットに向かっていく。

毎日仕事に追われているお兄ちゃんの荷を一つでも軽くしようと始めたのが料理だった。

死んだお母さんはママな性格で毎日食卓に並んだ料理を数冊のノートに綴ついて、そのノートを見つけた。

そしてそれ以来、少しでもお兄ちゃんに疲れを癒してもらいたくてお袋の味というものを何度も失敗しながら経験を積み立ててようつべそれを習得したのだった。

そして私が料理を作るようになつてからお兄ちゃんはどんな日でも朝食と夕食と一緒に摂るようになつてくれた。

それが今まで一日たりとも欠けたことはない。

まあ、病氣の時くらいは素直にお粥を食べて欲しいと想つたけど（お兄ちゃんはお粥が昔から今までずっと嫌いだ）。

そんなことを思い返しながらケータイを開くとお兄ちゃんから今日帰りが遅くなることを知らせるメールが届いていた。

私は今夜の夕食をお兄ちゃんが大好きなビーフシチューに決めた。

多分この時の私の頬は緩みまくつていただろう。

圧力鍋に焼き目を付けた牛肉のブロックを入れてから栓をして私は一息吐いた。

生前建築士をしていたお父さんが建てた家はこの辺りではほとんど見かけない鉄筋コンクリート製で二階建になっている。

当時まだ取り入れられていなかつた耐震設備を備えた我が家は当時破格の安さで作られたらしい。

今となつては普通の家の数倍するらしいけど、実験的な意味合いも含めていたローンはすでにお兄ちゃんが払い終わつてしまつたらしい、とかどうとか。

詳しく述べる兄ちゃんが教えてくれないからよくわからない、けどきっと本当だと思つ。

今日一日の洗濯物を干し終わり、ベッドメイキングやお風呂場掃除を終えた。

浮足立つた足取りでビーフシチューの出来具合を確かめようと立ち上がったところで私のケータイが鳴り響いた。

液晶を見れば時刻は午後九時を回っていて、着信相手はお兄ちゃんだった。

電話に出て、お兄ちゃんの声を聞いた私は反射的にカーティガンをつかんでいた。

『春香ちゃん。お兄ちゃんお酒飲んだからお迎えよろしく。車使っていいからー。』

「分かった。これから行くから多分三十分くらいだと想ひ。今どこにいるの?」

陽気なお兄ちゃんから居場所を聞き出した私はタクシー会社の番号を探しだす。

『ベルガモットってこうバーにいるよー。早く春香ちゃんに会いたいー。』

退行したお兄ちゃんに嘆息しながらも話を切り上げた私は手慣れてしまった手つきでタクシーを呼んだ。

ハートのアップリケが施されたエプロンを外してミルクティー色のカーディガンを羽織つて家出の為の準備をする。

タクシーに乗り込むとお店の名前を言つて、静かに溜め息を漏らした。

お金を払って領収書をもらつてから辺りを見回す。

お兄ちゃんはよく『毎日毎日頭ぶつけたまるかー』と自分の身長に憤っていたけど、頭一つと半分背の低い私からすれば近づけにしか聞こえない。

まあ、いつもして人探しをするときは見つけやすいから五分五分だと思つ。

なんて考へていると背中にボスッと妙に軽い衝撃がお酒のにおいと一緒に圧し掛かってきた。

「春香ちゃん、お迎え!」苦労まあ。お腹すいたか早く帰ろっか。そういうわけで可愛い妹ちゃんと帰るから君は帰ってくれていよい。はい、これタクシー代ね。バイバイ~。

お兄ちゃんが背中でゴソゴソと動いているせいで、体の向きを変え
るのに思いのほか時間を使ってしまった。

十メートルほど離れたところに綺麗に着飾つた女人が丁寧にお辞
儀する。

私もそれに倣つて会釈するとその女の人気が近付いてきて、その瞳に
明確な敵意が宿っていることに気付いた。

その綺麗な人は微笑みながら上品に笑つて口を歪に歪めた。

「初めまして、慶吾さんとお付き合いしている矢野 美佳と言いま
す。よろしくね。」

「初めまして、妹の春香です。大変言いにくいのですが、酔つてしまつと連れて帰るときに迷惑するのは私なので、今後このような機
会があるときは慎むよつて言つてくださいね。」

この人は嫌いだ、私は直感的にそう感じた。

微笑みながら返した私の言葉が気に障つたらしく眉を上げてせりへ言葉を紡ぐ。

「『めんなさいね、春香ちゃん。でも私も慶吾さんも大人なんだから気にしなくてもいいのよ。タクシーだつてあるし、大人には他にも色々な過ごし方があるから。彼氏と遊びたくなつたらいつでも言ってちょうだいね。オジヤマムシは私がどこかに連れて行ってあげるから。』」

頭の中で血管が千切れのような音が聞こえた気がした。

お兄ちゃんのことになると沸点が低くなる悪癖はいまだ治らないようだ。

ビンタの一つでもお見舞にしてやろうかと思つたところでお兄ちゃんが先に動いていた。

お兄ちゃんは笑顔で私とその人の間に立っていた。

「こりゃ、美佳。春香ちゃんはまだお子様なんだからあんまり刺激の強いこと言つたらダメだろ。それと春香、お前もだよ。美佳はお兄ちゃんの後輩何だから邪険にしちゃいけません。あと美佳、今日は悪いけどお開きな。春香が俺の好きなビーフシチュー作ってくれたんだ。じゃあな、美佳。」

お兄ちゃんはその人のほうにキスすると私の手を引いて歩きだした。

お兄ちゃんが悲鳴を上げていたけど、どうしてかは分からない。

……本当に。

第六話・隙

「絶対に嫌！！私、そんな恥ずかしいこと絶対にしないからね。お兄ちゃんのバカ！！」

一時間弱ある帰路を四分の一歩いた場所で私とお兄ちゃんは喧嘩していた。

「別にいいだろ、春香ちゃん。お兄ちゃんのお願い聞いてよ。一生のお願いだからー。」

ヘラヘラ、フラフラと千鳥足で私に着いてくるお兄ちゃんは何を思つたのかいきなり『春香ちゃんを抱っこする。』と駄々をこね出したのだ。

高校一年生になつて抱っこされたる女子高生の気持ちも分かつてほしい。

とこりか分かって。

お兄ちゃんはお酒に弱いくせにお酒が好きだ。

その上、ワガママになるし、自分の欲望に素直になる。

素直になってくれるのまつれしこナビ、トマロは最低頭打つてほしいと切に願う。

「へへへ、隙アリッ。」

「へ？ もう…や…放して、お兄ちゃん。」

溜め息を吐いた私の隙を突いて、お兄ちゃんは私を横抱き、いわゆるお姫様抱っこして歩き出した。

鏡で確認しなくても分かるほどに頬が上気している。

なんとか放れようと試みるが無理だった。

諦めた私はせめてもの妥協案としておんぶに変えてもう一つ事が出来た。

「昔より重たくなったな、春香。お兄ちゃんはひとつでも安心してつっこひ、叩くな……」

「女の子に重いとか言わないで……ただでさえ秋は体重が増えないか気になってるのに……！」

自分では思いつきり叩いているつもりなのにお兄ちゃんはケラケラと笑うだけだった。

夜の帰り道は静かで、氣の早い雪虫が幻想的に見えて、街灯すらも

幻想的に見えて、お兄ちゃんの背中が暖かくてつい口を開きしちまつ。

だからふと気が緩んでしまった。

「…………お兄ちゃんの背中って暖かくって、こんなに大きかったんだね。忘れてたよ、私。」

お兄ちゃんは頷くだけで何も言わず、揺れる。それにつられて私も揺れる。

「俺も、今日はプロポーズされた。」

「…………へえ、そうなんだ。」

なんとなくそんな気がしていた。

じつは、こやな感とこのせぬへ当たるのだからが。

長い時間をかけてようやく家に着いた。

でも何を話したのか覚えていない。

話したかも覚えていない。

気がつけば私はお兄ちゃんと一緒にビングに寝転がっていた。

第七話；味

「なあ、春香、水～～。」

「はいはい、お兄ちゃんはソフナーにてね。」

「春香～、は～や～～～～～水～～～～！」

床にうずくまつているお兄ちゃんはなんとも情けなかつた。

家に帰つてからお兄ちゃんはまたお酒を飲み出した。

ビールを飲んで、開けたら焼酎。

焼酎を飲んで、開けたらワイン。

ワインを飲んで、開けたらブランデー。

ブランデーを飲んで、開けたらヨウゼイギブアップ。

冷蔵庫の中にあるペットボトル詰めのミネラルウォーターとグラスを持つてお兄ちゃんが呻くソファーに向かう。

お兄ちゃんはグラスに注いだそれを飲むと顔をしかめた。

「春香、水が冷たいから飲めない〜。ぬるい水飲ませて、春香〜」

しなびたお兄ちゃんは眼を閉じながらそんな言葉を呟く。

私は返事をせずにグラスに口を付けた。

確かに冷たかった。

でも頬は熱かつた。

口の中でたっぷりと水を行き来させてからお兄ちゃんの両臉に左手を添える。

ピクリ、と小窓へ反応したけどそれ以上は何もなかった。

お兄ちゃんのサラサラとした前髪が流れ落ちる様子が見えた。

お兄ちゃんの伸びたように長い睫毛が見えた。

唇が暖かくなつた。

水を流し込むとお兄ちゃんがぬりへつと壁下する。

全部移し切ると汗と香水とお酒の匂いが混ざった匂いが流れ込んでくる。

お兄ちゃんの頬が赤いのは私の氣のせいだわ。

「もう一回欲しい。」

「うそ、ぬるい水ちょうどいい。」

「いいよ。」

結局ペットボトルの中身は全て私とお兄ちゃんの中に洒えてしまった。

「なあ、さぬ……」

「夢なの。」

お兄ちゃんが何かを言つてしまつ前に切つた。

「夢なの。これはまたまお兄ちゃんと私が同じ夢を見ちやつただけなの。だから夢なの。」

言つて聞かせるよひにひといお兄ちゃんの寝息が聞こえてきた。

私はそれに感謝すると毛布をお兄ちゃんにかけて冷蔵庫に向かう。

開けると一本だけ缶が残つていた。

それを手に取るとドアに手をかける。

一度交差してから自分の部屋に続く廊下を歩く。

私はその日初めてビールを飲んだ。

初めて飲んだビールはシュワシュワと炭酸が弾けて、苦くて、色々な味がした。

多分私はこれからビールを飲むことがないな、そんなことを考えながら瞼を落とした。

第七話・味（後書き）

「お愛読ありがとう」「やれこおした。

本編は終わりですが後書き、のようなものもありますのでもし良ければそちらもご覧くださいませ。

軽く、次回予告などもさせて頂きます

後書き（前書き）

本作の後書きと作者の愚痴、あと次回予告になつております

「めんなさーっ！－！」

星を題材に取り上げるとか言つておきながら近親ものを書き上げてしましました…

どうしてこう計画性が無いんでしょうかね？

いや、私が悪いってことはわかっていますよ…

でもなんだかこうなっちゃうんですね（遠い目

まあ、謝済がどんどん積み重なつていく気がします

いつそのこと政治家でも田指して見ましょうかね…

うそです、[冗談です。私にそんな國太い神経は通つていませんから

さて、反省も公開もしていますがいつまでも謝済を聞いている側は暇だと思つのでこうなつた経緯でも書きましょう

さて、こうなつた経緯と原因ですが私の気分です　おい

私、こう見えても氣分屋なんですよ。

なので計画していくとも書き始めた時の氣分で色々と変わっちゃうんで、色々と

まあ、そういうわけでこれを書き上げた時は兄弟愛を書きたい気分だったんですね、きっと

なのでとつあえず、もう一度「めんなさー

ではキャラについて少し

春香…シンタレーハちゃんです

ものす「ジバリ」コンです
でもツンデレちゃんです
私の周りにツンデレちゃんつていいないんですね…
誰かツンデレちゃんサンプル持つてくれないですかね？

慶吾…私の愚兄とそのお友達さんがモデルです
まあ、大体あんな感じなんですね、兄って
とっても書きやすかつたです、慶吾
ちなみに酔っぱらった時の慶吾が兄で、真顔になつた時の慶吾がお
友達さんです
同じ年なのにビーハーひも違つんでしょうが、男の人って不思議
です

ではお酒について少し

私が初めてお酒を口にしたのが一歳の時だつたらしいです（母談）
当時何にでも興味を示した私が手に取つてしまつたのがお酒だつた
そうです
しかもビールやチューハイではなくウイスキーのロック…
父たちは慌てたにもかかわらず母は笑いながら写真を撮つたとか…
・

以前見せてもらいましたがゆでたタコみたいになつてしました、全身

さて適度な長さになつてきたので次回予告（多分）

次回は短編で中世系か変愛系のどちらかにしようと思つています

ちなみに

中世系はミコージカルを見て思いつき、

変愛系はお風呂に入つていて思いつきました

やつこつわけでこれから
適当にアイディアを捻って
適当にプロットを固めて
適当にキャラクターザを纏めて
書こうと思っています

では長い間私の小説と黙文にお付き合い頂きましたがどうぞよろしく
その三つが決まつたら活動報告でお知らせさせていただきますね

和也 濱田

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2602p/>

お酒の覚え方

2010年12月18日17時31分発行